

唐僧獨湛。感於淺野侯家四十七士報讎之儀。薦以挽詩一篇。所謂大心元性者赤穗侯法名云。

薦

大心元性并四十六人等

我相未忘有恩怨。澄觀空性理自明。真人本體條々爾。三界空花洞洞然。劍刃化爲如意寶。怨恩盡作涅槃因。不若

西方歸去好。四十六人坐一蓮。

元祿未二月初四諱日

支那七十六叟沙門獨湛書

一、和州黃檗山主僧性安與福塘僧明逕往復書

久仰盛名。徒切霓望。自愧薄緣。未獲親面。每聞

座下繼席祖庭。大振門風。德被衆中。名著海外。足爲季代

典型。何幸祖庭得

座下出現。巋然若魯靈光。誠不愧爲

國師之嫡孫也。安與座下源流同派。形蹟相左。只得西向古

巖峰。臨風側耳矣。陳者安奉

上旨。主法黃檗。已闋七春矣。年來

聖恩隆渥。超出諸方。曾蒙賜紫衣。加以特發帑金。繕修伽

目のはやく掃除坊主も非を入ぬ様に座敷のはき拂ひせよ
人に只能くつかはれぬ坊主めはうち叩かるゝ筈と知べし
はきはらひ我身の役を勤れば思ひもよらぬ祿を求むる
すこしづつ物を盗める坊主めはやがて切るゝ相と知べし
見ん人の笑種にぞ書あつむ我つれゝの百の言の葉

一、瀝の製法

松脂一斤に二百斤也一油五合許、多寡は之に倣へ。釜の大きさ水

三升許、受る器には一斤の松脂を解くなり。沫を吹くこと

甚し。八分許に蒸上る時釜を口して沫を消し、沫消えて火

をあてて之を燃く。沫又上る。又おろして沫を消す。如此

すること凡三次にして沫收る。沫收て而後用之。屋下にて

煎する時甚慎むべし、失火の恐あり。若し沫釜外へ溢れ火に

あへば、火移て釜中に入不可救の故に、七八分の時必ず

火を去るなり。油を加へずして煎するにも、沫の消ゆるを

期とす。必しも悉無くなるを度とするにあらず。沫の上ら

ざるを度とす。是は日光を受る物に粘するに善し。油なう

して堅實なり。

一、唐僧獨湛の赤穂義士挽歌

藍。實祖山千古之光華也。安熟思東西黃檗。廻

國師隱老祖開法道場。爲兒孫者。當以協心竭力。遍相撐支。

觸起門庭。况

國師老人有囑語。祖山佗日主法。苟無其人。當往吾唐招

衆補住。但目今山中唐侶。多爲晨星。法道奈何。以故切

稟招衆之意。特蒙

上旨。許招四衆。此舉非有賴于法門。兼有光於從上也。

惟冀

座下念。其同本連枝。祖道鼎重。代擇越格衲子四位。過來相

佐。日後囑累大法。兼陸續繼住祖山。不惟

國師兒孫踏滿于兩國。永使濟下法脉。流通于萬世者也。

若問此方景况。上自

王臣。下及庶民。特崇佛法。不異梵華。而况重文章。尙忠

義。至于偷懶之徒。謀利之僧。共用不著矣。萬望

座下敢煩大手眼。選擇有志賢衲子。文質遵倫。機用超格。已

祭壇受具。樂然而至。則皆

座下之大賜焉。千里求賢。意有真切。惟祈掃悉。餘付請主

舌端。出此胃瀆。併候

法竊萬福。臨函無任仰望之至。

右啓 搏桑黃檗法弟性安加南拜

上

福唐黃檗堂頭壁和尚

電覽

法脉同源人地兩分。翹企

道風遠播。限以碧波萬里。莫能瞻謁

慈顏。帳也何如。至於屢承注及。遠頒厚惠。益令人感愧交

集。且未能少講其萬一。想在

老兄。以大圓鏡智。照了諸相。必然置我於世禮之外。無疑

矣。若欽聞。承恩之渥。與賜紫之榮。光映大千。豈特

祖山在弟之私已哉。仰美仰美。近高居士資來信物。俱已領

入。謝謝。及荷鼎囑以擇賢授其補處。既是吾祖法席。則

事同一家。况流通正脉。責任子孫。理當依

命奉行。但時際末運。道風日趨。欲求俊傑高才超格英邁之

士。甚非造次而得。必須慎重訪擇勘驗。頗有拔萃之姿。

然後方敢送其遠赴座下也。惟冀寬宥容遲期謀之爲禱。

第愧緣疎。忝繼先人之法。道抱歉久欲退藏。而蒙當道護